

# 障がい者のための森林利用のあり方を考える

## － 知的障がい者の余暇活動としての森林利用 －

林業試験場 道東支場 佐藤孝弘

### 研究の背景・目的

障がい者の社会生活支援は多様な分野の連携により進められるように変化しています。一方、森林は、地理地形的条件等から障がい者のための利用について研究されることはありませんでした。本研究は、森林体験活動（以下、活動と呼びます）の実践を通じ、知的障がい者の余暇活動の場としての森林利用のあり方について検討・考察を行うことを目的としています。



### 研究の内容・成果

#### 1. 知的障がい者とは？

知的障がい者は「知的機能の障がいが発達期にあらわれ日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にある者」とされています。直面する課題としては、適応機能（社会に適応して生活する能力）の不全による生活場面への不適応が挙げられ、生活全般に関して細やかな支援が必要です。



#### 2. 研究の進め方と調査項目

研究は2カ所の知的障がい者施設（施設A・B）と連携し、林業試が活動を提供し、施設側が活動評価等を行う形で実施しました。2011年～2013年に49回の活動を行い、取得データから、活動の運営に求められる事柄、活動時のコミュニケーションの特徴を分析しました（図1）。

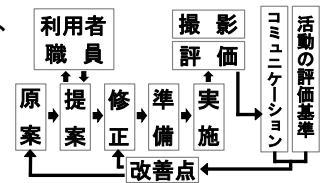


図1 取り組みの流れ

#### 3. 活動の運営に求められる事柄

活動評価データの分析から、施設職員は各活動を、①雰囲気（活気ある活動だったか？）、②重度者（重度者が参加できていたか？）、③計画性（活動時間は適切だったか？）、④新規性（新しい体験だったか？）、⑤事前情報（内容に関する事前説明は十分だったか？）、⑥体感性（五感に訴求する内容だったか？）の視点で弁別・評価していることがわかりました。

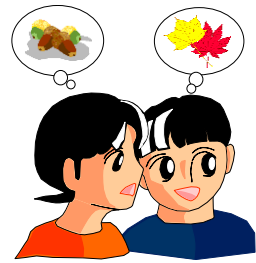
上記のうち、重度者の参加と各活動の構成条件との関連性を調べたところ、重度者の参加を容易にする条件として、①散策型の活動であること、②グループで行動する形であること、③移動が少ないこと、④活動で要求される動作が基本的（歩く・拾う等）であること、⑤動植物の提示があること等が見出されました。



#### 4. 活動時のコミュニケーションの特徴

活動の映像を分析し、コミュニケーションの特徴を調べました。分析対象者のうち、言葉の多い人たちは健常者と同様、指導者等に対して意見・質問を述べていましたが、①物事を予測する（たぶん～になる）、②事物への印象を述べたり連想する（これは～みたいだ）、③疑問を持つ（なぜ～なの？）ことに関わるコミュニケーションは健常者に比較して少ない状況でした。また、言葉の少ない人たちは、指導者等の指示に応じた行動や自発行動（非言語）が多く、コミュニケーション手段は非言語的でした。

本知見は調査事例が少なく、今後も検証が必要ですが、こうした調査分析は、活動時の知的障がい者の様子を正しく理解するために非常に重要と考えています。



### 今後の展開

- 自閉症等、重い障がいを抱える人たちへの森林活動のあり方や具体的な配慮事項等をさらに明らかにする必要があると考えています。
- 森林体験活動がもたらす療育上の効果をさらに具体的に検証することが必要と考えています。

